

# 新発見光明資料

50

ひかり編集室  
金田昭教

弁栄上人知恩院最終法話 その一 大正九年十月十六日より五日間に渡って、京都知恩院における別時念仏会が開催されました。それが当地における弁栄上人最終の法座となりましたが、なんと、その法話の内容を三名の方がそれぞれ筆記しておられるのです。ここで、その三者

の筆記を対照、もしくは互いに補完できるよう三段に分け、弁栄上人の御法話の全容になるべく多く触れていただけたらと思います。  
なお、照合しやすいように、空行を加え、また筆記の分量により、高さを調整しています。また、編者の挿入は「」内に表記しています。

## 菱田隆道上人筆記

出典―『光明讃歎』、京都市左京区公安院より昭和30年10月26日に発行。菱田隆道上人の十三回忌記念として、同上人の遺文を収録。その一―一七頁に掲載。復刊本も有り。

菱田隆道―一八六六―一九四三年。浄土宗公安院第三十三世。明治28年インドから帰朝された弁栄上人と京都にて初対面し、それからの深いご縁の方でもあり、弁栄上人没後も光明主義のため身命を捧げた方である。

以上編者付記、以下筆者の記述である。

## 中井常次郎氏筆記

出典―『乳房のひとつとせ』下巻、和歌山市無憂園より昭和18年12月15日に発行。筆者、中井常次郎氏による弁栄上人法話聞書並びに随行記。その二三八―二六七頁に掲載。本年三月、その聞書箇所などを主に抽出した『山崎弁栄 光明主義講話 大悲のことば』が出版されている。

中井常次郎―一八八八―一九四六年。京都帝國大学工学部機械科講師。大正8年に弁栄上人と出会い深く帰依し、弁栄上人没後、講師を辞し光明主義宣布に身命を捧げた。

以上編者付記、以下筆者の記述である。

## 潮田藤左右衛門氏筆記

出典―『ひかり』三八六―三八七号（平成2年1―3月号）に「弁栄上人知恩院最終講話」として掲載。筆記録は財団法人空外記念館蔵。

潮田藤左右衛門―筆記録表紙に山本空外上人筆による付記に「奈良県御所市玉手潮田和之氏の祖父、大正十年十月、三十六歳没」とある。その他は不明。

以上編者付記、以下筆者の記述である。

大正九年十月十六日より五日間、知恩院勢至堂にて弁榮聖者を導師として念仏三昧会あり。結衆一同心より御慈悲の光にうるおいしが、思いきや聖者は四十日後に淨き御国に歸り給わんとは。

今古きノートを見るにつけ、これが最後の京都の御説法と思えばいとど「『まします』」当時が懐かしく、これを空しく筐底〔「箱の中」〕に措くに忍びず、心覚えのノートを頼りに再度整理を完了して、ここに光明の友に捧ぐ。

昭和八年十二月四日  
聖者御祥忌日

末弟隆道記

〔大正九年〕十月十六日より二十日まで、京都の知恩院山内、勢至堂で五日間の別時念仏三昧会が開かれた。

九月三十日に、上人は山陰地方へ伝道に赴かれるとて京都を通られた。自分は松井君と京都駅で上人を迎送した。蚊野仙次郎氏は二条駅から随行した。帰京後、蚊野氏は上人を非凡な方だと感じた事に就いて、こんな話をした。上人は、どうして私の前半生を御存知であったか。車中、上人は私に「そういう場合、アメリカではユウシイというでしょう」と仰った。その時、蚊野さんはドキッとしたという事である。

著者でさえこの時まで、懇意な蚊野さんが、若い時にアメリカで働いた事が有ったとは知らなかった。

十月十五日、上人をお迎えする為に自分は二条駅へ行った。まだ誰も来ていなかった。御着車の時刻が近づき、信者は次第に集まった。

汽車は着いた。上人は現れた。一同は供をして恒村医院に落ち着いた。直ちに二階の仏間で半時ばかり共にお念仏を申した。それからお話があった。

十六日、三昧会が始まった。この日、大学は遠足日であった。それで自分は終日別時に就く事ができた。

十七日に父、上京。母は知恩院山内で泊り込みで別時に就いた。母が歩行不自由のため女中を附添いにともなった。

十八日、今日も学校を休んで知恩院へ行った。昨日は母が、今日は父が、上人に初対面を許された。

真宗の忠実なる信者としての父が、他宗の本山で木魚時雨の中において終日、念仏申し説教を聴聞し、上人に対して帰依心を深め得た事はまことに幸である。しかるに兄は幾度かの招きにも応せず、自宗の砦に立籠り、とうとう御縁を結んで頂けなかった。上人の遷化に遇いて後悔し、墓前に陳謝し、山下現有上人に拝謁し、御自筆のお名号を頂き、せめてもの思い遣りとした。上人は父の参詣をお悦び下され、

# 知恩院勢至堂別時念仏三昧会略記

大正九年十月十六日より同月二十日に至る祖山勢至堂に於ける山崎上人御指導御別時の概要

## 別時中時間割

|   |       |              |
|---|-------|--------------|
| 一 | 午前四時半 | 起床           |
| 一 | 同五時   | 一番廊鏡         |
| 一 | 同五時半  | 入道場          |
| 一 | 同六時半  | 朝食           |
| 一 | 同八時   | 入道場          |
| 一 | 同九時半  | 休息           |
| 一 | 同十時   | 講話           |
| 一 | 正午    | 中食           |
| 一 | 午後一時  | 入道場          |
| 一 | 同二時半  | 休息           |
| 一 | 同三時   | 講話           |
| 一 | 同五時   | 晩食           |
| 一 | 同五時以後 | 入浴男女交番       |
| 一 | 同七時   | 信仰座談会、雪香殿に於て |

以上

## 注意

一、御別時は真剣なる事。昔の行者は別時中は衣を改め心を俗事より離して専心に徹夜にて念仏されたという事であります。

長々と御法話をして下さった。

日中は勢至堂で念仏三昧が勤修され、夜は下の雪香殿で『礼拝儀』を称え、お念仏を申し、お説教を聞き、聖歌を歌った。自分は、いつも第一線に席を占めて木魚を打ち、ペンを走らせたのであった。

この日、夕食後、夜のお勤めの始まる前、雪香殿の控室で、籠島咲子夫人のお話を初めて承った。わが為にはその後、聖母として信仰をお育て下さった越後柏崎町極楽寺の咲子夫人を初めて見た記念すべき日である。奥様は良く太り、どっしりと落ちつきのある方で、お浄土の莊嚴に就いて、三昧中の実感を語られた。多くの人々と共に、自分はお話を聞いた。夫人は右手を挙げて、「ここに仏様がいらして、今、私の言葉に間違いの無い事を保証して下さるから、私はどなたの前でも安心してお話ができます」といわれた。少しの飾り気も無いその真実なる言葉と態度に感激した自分は、涙止まらず、合掌平伏した。この有様を見て側の人達も涙を流してお話を拝聴した。自分はこのお話を聞き、己が懈怠を戒め、精進してお上人様の慈恵に応えねばならぬと励まされた。

十九日に初めて梅子が知恩院へ来て、上人様に挨拶を申し上げ葡萄を供養した。よろこび召し上られた。女中が帰郷した為、家事に追われ今日まで登山できなかったのである。けれども隣の市川さんは嵯峨から親戚の娘を呼び寄せ、手伝わせて下さったので留守居を頼んできたのである。

二十日の正午に別時が終った。一同御廟と大殿に参拝し、お別れとなった。その夜、私共は上人を京都駅にお見送り申した。桑田上人は、満願の日に雨降るは神仏の感应があったのだらうといって喜ばれた。平三郎は上人のお供をして東京へ帰った。

〔以下聞書〕

〔以下聞書〕

私共も行く行くは篤信者によりて徹夜断食（水又は薄き粥少量とりて）、無言の三昧会を催したいと存じて居ります。依て雑談を御遠慮下さい。

一、規定通り時刻をたがえず道場に出入すること。休み時にはなるべく外気と日光とに浴すること、而してあまりに御上人の御室に出入して御仕事と御休養のさまたげをなさらぬ様に願います。伺い度い事は夜の座談会にして下さい。日中は念仏ばかりに身も心をも献げて下さい。

一、食事。朝夕は雪香殿にて各自指定の席にていただく事。箸を執る前に着席の上、数十遍の念仏をします。柏子木〔「割笏」の音で終り食事にかかる事。席を去る前には柏子木によりて合掌念仏すること。（たべ後れた方は念仏後ゆるゆる）食量は平常よりも軽きをよしとす。昼食は勢至堂にて弁当を差上げます。弁当券と引きかえます。茶菓を一切出しませぬ。御菓子を持来せぬ様に願います。茶がほしい方は単独に貰って下さい。

一、会費。宿り込みの方は一日一円の割です。この中には食費その他一切の費用が込めてあります。また弁当御持参にて御宅より通わるる方は一日四十銭の会費を御納め下さい。弁当券一枚十五銭。

〔※潮田氏の聞書は、他の聞書と対照すると、十七日午前の法話途中から筆記開始のようである。〕

十月十六日午前

## 別時念仏の要領

二祖（鎮西）上人は八ヶ年間元祖（法然上人）に従われて法を求められた。その上人は別時念仏の心得について、「念仏するには所期（目的）がなければならぬ」と言われた。すなわち念仏には目的がある。別時念仏の目的は見仏するにある。その見仏に二通りある。

一、如来の御姿を見奉ること。

二、如来の御心を見奉ること。

最初は煩悩のために念仏しても感応がない。それは表面の心で念仏するからである。けれども念仏を続けているうちには次第に深く入ることができる。蠟燭に点火する間は暫く<sup>しばらく</sup>なれども、一度火を点ずれば蠟燭のある限り光を放つように、われわれに信仰の火がつくのはしばらくの間であるが、その人一生涯肉体のある間は智慧の光明生活となってこの世界で燃え、心は永生<sup>えいせい</sup>となって永遠の光の中に住むようになる。死後も永遠の光明として輝くのである。

動物生活のみならば、人生は闇の生活である。如来の光明を受けるのが人生の目的である。その光明を心に燃えつけるのが念仏三昧の目的である。釈尊が十二月八日の暁<sup>あけ</sup>に悟りを聞かれたのは、阿弥陀如来の光明が釈尊のお心に燃えついた時である。元祖大師のお心に燃えついた火が当時の人々の心に燃え移り、今に輝いている。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

弥陀の光明は照さざる処なけれど、外からは見えぬが燃えつくと見えてくる。

〔十月十六日午前〕

## （二）別時念仏の要領

二祖上人は宗祖に八ヶ年つき添うた方であるが、別時念仏の心得に就いて「念仏には所求（目的）なかるべからず」と述べられてある。

ロウソクに火のつくのは暫らくであるけれども、火はロウソクの無くなるまで燃え続ける。人に信仰の火のつくのは暫らくの間であるが、その人一生涯光明生活となってこの世界で燃え、死後も永遠の光明として輝くのである。

動物生活のみならば、人生は闇である。如来の光明を受けるのが人生の目的である。心に如来の光明を燃えつかすのが念仏三昧の妙行である。十二月八日の暁<sup>あけ</sup>に如来の光明が釈尊のお心に燃えついたのである。元祖大師の心に燃えついた信仰の火は当時の人の心に燃え、今に輝いている。

月影の到らぬ里は無けれども

ながむる人の心にぞすむ

如来の光明はどこにでも照り輝いているけれども、外から見えない。信仰が燃えつくと見える。

念仏三昧を宗と為し、往生浄土を体と為す

一心に弥陀を念ずれば、弥陀と自分の心とが一つになる、これを三昧という。闇と光と合すれば明るくなる、すなわち吾人の煩惱が靈化される。

往生浄土には二通りの別がある。『大原問答』に示された所からでは「往」にか、ワ、ルという訓がある。すなわち往生とは弥陀の光明中に生まれ更ることである。生まれ更りに、心の生まれ更りと身の生まれ更りがある。釈尊の御在世中には、明らかにこの二つがあった。有余涅槃と無余涅槃があった。「涅槃」とは弥陀の光明の実現したる世界である。「無量寿世界」とは常樂土の世界である。その光明生活に有余と無余との二種がある。「有余」とは肉体あれども教えのままに修行すれば、心の世界では常樂の生活ができる。すなわち「心広く体胖<sup>ゆた</sup>かなり」となる。心が暗ければ世界は狭い。信仰に心開けぬ間は人の心は狭い。そのときはこの五尺の肉体の中に心があると思っている。

「往生浄土を体と為す」とは、「体」は目的である。念仏三昧の目的は智慧の光を心に燃えつけるにある。心の置き所が正しく確かでなかったならば、御光は移らない。蠟燭<sup>ろうそく</sup>の心を火の上にまっすぐに持って行けばすぐ火はつくが、方向を誤ればいつまで待っても火はつかぬ。念仏三昧とは、一心一向に弥陀に心を向けることである。心の向け方を誤るときは、いかに努力しても信仰の火は燃えつかぬ。蠟燭はすぐ火は燃えつくが、信仰の火はなかなか人の心に燃えつき難い。それは三障があるからである。三障とは業障(過去)、罪障(現在)、煩惱障(未来)をいう。日常働く五欲の心は表面にあるから、すぐ感じて火が燃えつく。例えば人前で辱<sup>はか</sup>められると怒りの炎はす

○念仏三昧を宗となし、往生浄土を体となす。

一心に弥陀を念ずれば、自分と阿弥陀様とが一つになる。これを三昧という。暗と光明と合すれば明るくなる。

往生浄土に二つの意味がある。『大原談議』に往生に「かわる」という訓がある。即ち往生とは弥陀の光明中に生まれかわる事である。

生まれかわりに、心の生まれ更わりと身の生まれ更わりとある。お釈迦様の御在世中には、はつきり有余と無余の両涅槃が有った。涅槃とは弥陀の光明の実現した世界である。その光明生活に有余と無余との二種ある。有余涅槃とは肉体を持ちながら、教えの儘<sup>まま</sup>に修行せば、心は極樂の生活となる事であって「心ひろく、体ゆたかなり」といつている。心が暗いと世の中は狭い。信仰心が開けぬ間は人の心は狭い。この五尺の身体を心の住居だと思っている。

「往生浄土を体となす」の「体」とは目的の事である。弥陀の光明を心に燃えつけるのが念仏三昧の目的である。心の向け方を誤る時は、如何に努力しても信仰の火は燃えつかぬ。念仏三昧とは、一心に心を弥陀に向ける事である。

ロウソクを燃え火の上に持ち行けば、すぐ火は燃えつくけれども、信仰の火は業障、罪障のために、なかなか燃えつき難い。常に働いている五欲の心が表にあるから、一時如来の光明を感じても、なかなか心に燃えつかぬ。人に辱められる

ぐ心に燃えつく。

けれども心の奥にある仏性は一切衆生が悉く持つているのであるが、煩惱に覆われて光明に触れない。善導大師は「三障が除かれると光明が感ぜられてくる」という意味のことを言われた。ただし自力ではこの三障はなかなか除かれない。一心に念仏すれば如来の炎王光に照らされて焼き尽くされる。

業障は生まれながらに持つている障りで、前生から持ち越しの障りである。罪障はこの世で造った罪の障り。煩惱障は煩惱があるから未来に罪を造り、そのために生ずる障りである。

「聞けども聞えず、見れども見えざるは、三惡道から初めて人間世界に生れた者の性分である」と經に説いてある。これは説法を聞いても信ぜられず、聖者を見ても聖者とは思わぬ者をいう。これらの人々は説法を聞いても信じようとはせぬ。

己が罪を何に照らして知るかというに、弥陀の光明中にありながら、それが心に燃えつかぬは、自分の業障のせいである。故に「念々ねんねんしやうしやうさんげ称名常懺悔」〔出典―善導大師『般舟讚』と懺悔の涙を流して罪を解いて貰わなければならぬ。業障が薄らいでくれば光明を感じるようになる。光明が心に燃えつけば、その人の生活が光明生活となる。すなわちそれからの日暮らしは、極樂世界への旅となる。蠟燭は重さなき火に食べられてしまうように、三惡道の重罪も如来の光明に食べられてしまう。〕

と怒りの炎は直ぐ心に燃えつく。

一切の衆生は悉く仏性を持つているけれども、仏性は煩惱に覆われて光明に触れない。業障、罪障、煩惱障という三障が除かれると光明を感じるようになる。この障は自力では、なかなか除かれない。一心に念仏すれば炎王光に照らされて障りは除かれる。

業障——生まれながら持つている障

罪障——この世で造った罪の障

煩惱障——煩惱が有るから未来に罪を造り、そのために生ずる障りである。

聞けども聞こえず（説法を聞いても信ぜられぬ事）、見れども見えざるは（聖者を見ても聖者とは思わぬ）初めて三惡道から人間世界に生まれた人であると經に出ている。これらの人々は説法を聞いても信じようとはせぬ。

どうすれば自分の罪を知る事ができるか。弥陀の光明中にありながら、信仰の火が燃えつかぬは、業障の為である。念々称名、常懺悔と懺悔の涙を流して障りを除いて頂かねばならぬ。業障が薄らげば、光明を感じるようになる。光明が心に燃えつけば、一生の間光明生活となる。即ちそれからの日暮らしは、極樂世界への旅となる。ロウソクは重さの無い火に食べられてしまうように、三惡道の罪も如来の光明に食べられてしまう。

〔十六日午前の法話 完〕